

発達障害を有する青年の適応と課題：集団心理療法 「もくもくグループ」の終結者を対象とした追跡調 査から

座間味, 愛理
九州大学大学院人間環境学府

遠矢, 浩一
九州大学大学院人間環境学研究院

針塚, 進
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1448906>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 4, pp.87-97, 2013-03-29. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

発達障害を有する青年の適応と課題

— 集団心理療法「もくもくグループ」の終結者を対象とした追跡調査から —

座間味愛理 九州大学大学院人間環境学府 / 遠矢浩一 九州大学大学院人間環境学研究院

針塚 進 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

発達障害児・者は生涯にわたり専門的な支援が必要であると言われるが、発達障害の理解と早期支援により適応状態は変化する可能性がある。本稿では、児童期に集団心理療法を経験した青年16名（平均17.50歳）に追跡調査を行い、現在の適応状態を把握することで発達障害を有する青年の心理支援について検討した。その結果、10名は抑うつ傾向が正常～比較的良好であり、適応感を持っている状態であった。一方、6名は抑うつ傾向が高く、抑うつ低群に比べ劣等感が高かった。また、本人と保護者への半構造化面接より、抑うつ低群は、家庭や所属先で問題があっても主体的に相談・解決を試みることで対人関係に支えられた適応感を持っていることが示された。一方、抑うつ高群は主体的に取り組んでいる感覚が乏しく、相談相手や将来展望の有無が適応感に関連していることが示唆された。発達障害を有する青年の適応に重要な要因と支援について考察した。

キーワード：発達障害、青年、適応、追跡調査

1. 問題と目的

高機能自閉症、アスペルガー障害、注意欠陥多動障害といった対人面での困難さをもつ発達障害児・者は生涯にわたって専門機関との関係が必要であると言われている。従来の自閉症をはじめとする追跡調査では、対象者の約半数から8割が予後不良 (poor) とされてきた (小林・村田, 1990)。しかし、加藤ら (1994) が述べるように、発達障害児が受けてきたこれまでの成果と社会的な理解が得られる社会基盤が整うことで、その予後像は変わりうる可能性がある。

発達障害やその傾向を有する児童への支援として、遠矢・針塚 (2006) は「集団」に着目した個別支援形式集団療法「もくもくグループ」を平成8年より実施してきた。もくもくグループは、遊びや他児との関わりを通して集団の場で適切な自己表現を促し、他者に受け止められる体験、同年代の友人関係の体験などをねらいとして行われている。また、子どもを対象としたプログラムと平

行して保護者を対象とした親の会も行われており、日常に近い集団場面における子どもの様子をセラピストと共有し、親同士の受容的な雰囲気やベースとした子ども理解の場としても機能していると考えられる。これまで、もくもくグループの参加者・保護者を対象とした心理療法の効果や有効なプログラム検討が行われており (遠矢・針塚, 2010)、その意義は大きい。また、平成22年度には参加者が160名を超え、初期に参加した者は青年期にあたる者も多く、児童期に集団心理療法を経験した者の適応状態について把握し、生涯発達の上で必要とされる支援について検討する必要がある。

そこで本研究では、集団心理療法「もくもくグループ」終結後の青年の適応状態について把握するために追跡調査を行い、青年期に必要な心理援助について検討した。その際、発達障害を有する青年の現在の適応状態を抑うつ傾向、青年期の適応感から把握し、更に個別の状態を詳細に

把握するための面接調査を行った。終結者の現在の適応状態に関連する要因について検討し、その課題の把握を通して対人関係に困難を有する青年に必要な心理援助について考察を加えることを目的とする。

2. 方法

1) 調査対象 発達障害児への集団心理療法「もくもくグループ」に、過去2年以上参加していた青年16名(男性14名, 女性2名, 平均年齢17.50歳(SD=2.00))。以下, 発達障害群とし, 対象者の特徴をTable1.に示す。

Table1. 対象者の特徴

対象者	年齢	学年等	性別	診断名
A	22	社会人	男	なし
B	20	専門学校2年	男	学習障害
C	20	作業所通所	男	精神発達障害
D	19	高専4年	男	なし
E	19	就労支援施設	男	ADHD・アスペルガー症候群
F	18	高校3年	男	アスペルガー症候群
G	17	高校3年	男	なし
H	17	高校3年	女	ADHD
I	17	高校2年	男	なし
J	17	高校2年	男	なし
K	16	高校1年	男	なし
L	16	高校1年	男	言語 発達障害
M	16	高校1年	男	なし
N	16	高校1年	男	LD・アスペルガー症候群
O	15	高校1年	女	高機能自閉症
P	15	高校1年	男	自閉症

2) もくもくグループの概要

隔週1時間, 遊び性を取り入れたより自然な形での対人関係・社会性・友人関係の体験を経験することをねらいとする集団心理療法。グループの人数は子どもが5~10名程度であり, ひとりの子どもに受容的に関わるセラピスト1名, 補助役・参加を促すコ・セラピスト1名がつき, グループ全体をまとめるグループリーダー1名~2名がつく構造。対象児の年齢や特性に応じたプログラムが構成され, 具体的には集団で行われる身体あそび(ドッジボールやバスケットボールなど)に仲間と協力するルールなどを加えた遊び, 心理劇を通じた自己表現や仲間を受け入れられるプログ

ラムが構成された。また, 親の子どもへの理解や情報共有の場になることをねらいとする親の会も並行して行われ, 親の会においてもセラピスト3~4名が担当した。

3) 調査方法 郵送による質問紙調査を行った。調査項目

①保護者用フェイスシート:

子どもの現在の年齢・所属・診断名等への記入を求めた。

②ベック抑うつ尺度(BDI-II):

ベック抑うつ尺度の日本語版(1988)21項目を用いた。回答形式は0~3の4件法。21項目の合計を抑うつ得点とし, 正常の範囲内(1~10点), 気分の軽い落ち込み(11~16点), 病的な抑うつ状態と言えるかの境界レベル(17~20), 中程度の抑うつ状態(21~30点), 重度の抑うつ状態(31~40点), 極度の抑うつ状態(40点以上)とした。

③青年用適応感尺度:

大久保(2005)の青年の学校への適応感尺度30項目を用いた。青年用適応感尺度は, 「周囲に溶け込んでいる」「将来役にたつことが学べる」「周りから頼られていると感じる」「周りに迷惑をかけていると感じる」などの因子から構成され, 回答形式は「少しもあてはまらない」(1点)~「とてもあてはまる」(5点)までの5件法である。

④【半構造化面接】

郵送による質問紙調査を実施し, 同封した書面にて本人及び保護者から面接調査への同意が得られた者のうち, 本研究の目的に沿って, 抑うつ傾向が低く適応状態が良好とみなされた事例と抑うつ傾向が高く適応状態が不良とみなされた事例の面接調査を分析の対象とした。本人に対する質問項目と保護者に対する質問項目はTable2-1, 2-2に示す通りである。本人の面接の実施においては, 調査目的の説明を行い, 知的発達の状況や言語的能力, 対人コミュニケーション能力について臨床的配慮を行いながら実施した。

Table2-1. 本人への半構造化面接の質問内容

本人への質問内容	教示例
1 学校・職場への適応状況	「今、学校（職場）では、どんな勉強（仕事）をしていますか？」 「学校（職場）は楽しいですか？」 「どうして楽しい／あまり楽しくないと思いますか？」
2 友人関係・対人関係の状況	「休み時間や休みの日は、どんなこと（遊び）をしていますか？」 「友達と過ごすことは楽しいですか？」 「どうして楽しい／あまり楽しくないと思いますか？」
3 家庭での状況	「家に帰ってからは、どんなことをして過ごしていますか？」 「家族と過ごすことは楽しいですか？」 「どうして楽しい／あまり楽しくないと思いますか？」
4 今後の展望・援助期待	「今困っていることや相談したいことを話せる人はいますか？」 「もくもくグループのようなグループ活動にまた参加したいですか？」 「将来の夢はありますか？」

Table2-2. 保護者への半構造化面接の質問内容

保護者への質問内容	教示例
1 学校・職場への適応状況	「現在〇〇に通われているとのことですが、ご様子はいかがですか？」
2 友人関係・対人関係の状況	「学校の休み時間や休日などは、どのように過ごしていますか？」 「一緒に遊ぶ友人はどのくらいいますか？」 「お友達との関係はいかがですか？」
3 家庭での状況	「ご家庭の中ではどのように過ごしていますか？」
4 今後の展望・援助期待	「現在お困りのことや課題だと感じているらっしゃることはありますか？」 「もくもくグループの様な活動にまた参加したい／させたいとお考えですか？」

3. 結果と考察

1) 抑うつ傾向について

BDI-IIの採点方法に準じ、対象者の抑うつ傾向得点を算出した。結果をTable3.に示す。対象者16名のうち、正常範囲～軽い落ち込みレベルが10名（62.6%）を占めたことから、発達障害群の精神的健康度はおおむね良好であったことが示唆された（平均=15.56, SD=11.87）。一方、中程度の抑うつ状態が2名、重度の抑うつ状態1名、極度の抑うつ状態が1名であったことから、青年期においても継続的な支援へつなぐためのフォロー

が必要なものもいることが示された。

Table3. 抑うつ尺度得点の結果

BDI 得点	評価	N (%)
1～10	正常範囲内	7 (43.8)
11～16	気分の軽い落ち込み	3 (18.8)
17～20	病的な抑うつ状態といえるかの境界レベル	2 (12.5)
21～30	中程度の抑うつ状態	2 (12.5)
31～40	重度の抑うつ状態	1 (6.3)
40～	極度の抑うつ状態	1 (6.3)
		計 16 (100)

2) 適応感について

適応感尺度について、大久保（2005）に準じた各因子項目の信頼性係数を算出したところ、「居心地の良さの感覚」については $\alpha = .952$ 、「課題・目的的存在」については $\alpha = .896$ 、「被信頼感・受容感」については $\alpha = .918$ 、「劣等感の無さ」については $\alpha = .835$ であり、十分な値が示された。尺度項目と α 係数をTable4.に示す。

Table4. 青年用適応感尺度（大久保，2005）と因子の α 係数

<項目>
I. 居心地の良さの感覚 ($\alpha = .952$)
周囲に溶け込んでいる
周囲となじめている
周りの人と楽しい時間を共有している
自由に話せる雰囲気である
自分と周りがかみ合っている
ありのままの自分を出せている
周りに共感できる
リラックスできる
幸せである
安心する
周りと助け合っている
II. 課題・目的的存在 ($\alpha = .896$)
将来役に立つことが学べる
これからの自分のためになることができる
やるべき目的がある
好きなことができる
成長できると感じる
充実している
熱中できているものがある
III. 被信頼感・受容感 ($\alpha = .918$)
周りから頼られていると感じる
周りから期待されている
周りから必要とされていると感じる
周りから関心をもたれている
存在を気にかけてられている
良い評価がされていると感じる

IV. 劣等感のなさ ($\alpha = .835$)

- * 周りに迷惑をかけていると感じる
- * 自分だけだめだと感じる
- * 役に立っていないと感じる
- * 嫌われていると感じる
- * 周りに指示や命令をされているように感じる
- * 自分が場違いだと感じる

注. *がついている項目は逆転項目を示す。

大久保 (2005) の高校生男子の平均得点と発達障害群の適応感尺度得点との差について各因子得点を従属変数とした t 検定による平均値の差の検定を行った。

その結果、「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼感・受容感」、「劣等感のなさ」のすべての因子において有意な差は見られなかった。結果を Table5-1. に示す。

適応感とは適応そのものを意味する概念ではないが、本研究で対象となった卒業生においては、一般の青年と同程度の適応感をもっている状態であることが示唆された。発達障害や対人関係に困難を有する青年が学校や職場において周囲となじめている感覚がもてることは、二次障害の深刻化を予防できている状態と捉えられ、児童期に集団から受け入れられる体験がその後の適応感にも影響していると考えられる。

3) 発達障害群における抑うつ傾向と適応感の関連

発達障害群の抑うつ傾向と適応感の関連を検討するために、BDI-II の得点が病的な抑うつ状態と言えるかの境界である17点を指標として17点以上である者を抑うつ傾向高群、17点以下の者を抑うつ傾向低群として適応感尺度の各因子得点を従属変数とした t 検定による平均値の差の検定を行った。

その結果、抑うつ傾向の高低による「劣等感のなさ」因子のみにおいて抑うつ低群よりも抑うつ高群の方が有意に低かった ($t(15) = 3.06, p < .05$)。一方、「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼感・受容感」因子において有意な差は得られなかった。結果を Table5-2. に示す。

発達障害や対人関係に困難を有する青年のうち、抑うつ傾向が高い者は、特に「周囲に迷惑をかけている感覚」や「役に立っていない感覚」をもつことと関連していることが示唆された。青年期は、社会的な自立や社会の役に立つといったことが求められる時期であり、そのような課題に直面した際に自分が役にたっていないと感じることが抑うつ

Table5-1. 適応感の平均値の比較

		N	平均値	標準偏差	t 値
居心地の良さの感覚	統制群	597	37.57	8.51	-.56
	発達障害群	16	36.60	11.29	
課題・目的の存在	統制群	597	25.43	5.92	-3.97
	発達障害群	16	24.75	6.84	
被信頼感・受容感	統制群	597	16.46	3.86	.23
	発達障害群	16	16.81	6.07	
劣等感のなさ	統制群	597	20.68	4.14	-1.03
	発達障害群	16	19.31	5.31	

Table5-2. 発達障害群の抑うつ傾向高低群における適応感の平均値の比較

		N	平均値	標準偏差	t 値
居心地の良さの感覚	高群	6	32.50	10.92	.93
	低群	10	38.10	12.01	
課題・目的の存在	高群	6	22.67	7.47	.91
	低群	10	26.00	6.51	
被信頼感・受容感	高群	6	14.50	6.66	1.14
	低群	10	18.20	5.57	
劣等感のなさ	高群	6	12.33	4.76	3.06 *
	低群	10	19.30	3.77	

* $p < .05$

つ感を高め、臨床的なケアが必要となる場合があると推察される。発達障害を有していても青年期に自分の特性や能力的側面を社会的に位置づけ、社会的に必要とされていると感じることが臨床群と非臨床群の違いであり、重要な支援の視点となると言えよう。

4) 面接調査による適応状態の検討

発達障害群の予後について、より詳細に捉えるために面接調査を行った。その際、質問紙調査の結果から抑うつ傾向得点が低かったE (13点), J (1点), L (13点) の3名を抑うつ傾向低群、抑うつ傾向得点が高かったF (30点), N (29点), K (32点) の3名を抑うつ傾向高群とし、本人面

接と保護者面接の内容を分析の対象とした。

① 学校・職場への適応状況について

本人の現在の所属における適応状態について、本人と保護者への聞き取り内容をTable6-1.にまとめた。

結果より、抑うつ低群と高群のどちらにおいても学校や職場で明確な問題性についての言及はなく、周囲と関わりをもちながら過ごしている状態であることが示された。

しかし本人からの聞き取りにおいて、抑うつ低群は学校や職場について「(仕事は) 体力面では大変ではない」「〇〇がめんどくさい」「〇〇が難しい」「楽しいところは〇〇なところ」など出来

Table6-1. 面接調査内容 (1) 学校・職場への適応状況

対象	性別	BDI 得点	現在の年齢	現在の所属	本人からの聞き取り	保護者からの聞き取り	
E	男	13	19	就労支援施設	仕分けの立ち仕事をしている。体力面ではそんなに大変ではない。	他施設では受け入れられなかったが、今は就労支援施設で仕分けの仕事。今後、SSTに力を入れる予定。自分ではできないと自覚している挨拶やコミュニケーションについてはあきらめているよう。	
抑うつ低群	J	男	1	17	高校2年	〇〇部のやつらがめんどくさい。	いたって普通。自分でやっているし友だちもできている。よくメールもしており、男女問わず家に来ることも。ケータイで1時間話したり成績も平常点ももらっている。困っているのは、〇〇部の奴らなどと言っている。
	L	男	13	16	高校1年	学校では職業訓練がある。例えば社会に出たときに役立つようなこととか。最近は商業体験で、店の配達とかを2日間やった。朝は9時から3時まで。楽しいところは、いろんなことができること。特に、免許とか資格とか取れるところ。でも、今危険物の資格の勉強は法令とか難しい。	学校内で仲良くできる人ができたよう。生活面では、昨年暮れごろから、朝起きて1人で電車にも乗れるようになるなど成長も見える。掃除や洗濯など身の回りのことはなんとかやっている。寮に入った当初は、先輩とのトラブルあり、先生が介入することもあったが最近では以前に比べるとうまく引ける部分も出始めた。
抑うつ高群	F	男	30	18	高校3年	いつも家にいる。	学校の先生には相談ができるようになった。学校自体の雰囲気、学校に来たらOK、テストも受ければOKという雰囲気だったので、テストの成績は低かったと思う。学校の枠の緩さからくる不安や焦りを母は感じていた。
	N	男	29	16	高校1年	〇〇高校にっている。楽しい。話が合う人もいるし。授業は疲れる。眠くなる。今は〇〇部。	今は特に困っていることはない。〇〇部に所属しており、顧問の先生にも相談できている。部活の人もやさしく、困ることなく通えている。
	K	男	32	16	高校1年	〇〇高校。＜勉強は好き＞数学が好き。＜学校は楽しい＞普通。	成績は悪くない。先生との関係もうまく行っている。クラブに入っている。友だちとは学科が違い、女の子たちが多い学科に在籍しており、男子の友だちは時間が合わない。そこまで困っていることはない。たまにからかわれて争うことはある。その時は叫んだり、物を投げることがある。授業中にちょっかいかけられたり、触られたりするのが嫌。後半から慣れてきた。担任から周囲に「嫌がるから言わないように」と話してもらった。

事や具体的な側面について言及している傾向が見られた。また、保護者からの聞き取りにおいては、本人が自分で自覚している部分や「自分でやっている」側面についての語りが見られた。一方、抑うつ高群の本人からの聞き取りにおいては、学校や職場の様子についておおまかに回答している傾向が見られ、保護者からの聞き取りにおいては先生に相談する・介入してもらうことで大きなトラブルなく過ごせている様子が共通して語られた。

抑うつ傾向の有無にかかわらず、学校・職場での顕著な問題性は見られないが、抑うつ低群は自ら主体的に取り組んでいる様子に違いがあると考えられ、所属先で取り組める範囲で主体的に行動できていることが精神的健康に関連すると考えられた。

② 友人関係・対人関係の状況について

本人の友人関係と対人関係における適応状態について、本人と保護者への聞き取り内容を

Table6-2.にまとめた。

結果より、抑うつ低群と高群のどちらにおいても対人関係における大きな問題性についての言及はなかった。しかし、抑うつ高群の本人からの聞き取りの中には「友だちと遊ぶことはない」や「教えません」が見受けられ、抑うつ低群の保護者からの聞き取りにおいても「友人はいない」と明確に述べられるケースが存在することが示された。抑うつ傾向と友人関係・対人関係との関連や予後を左右する特徴的な記述の差異は見られなかったが、高校に所属している場合には、同年代の友人とゲームや遊びを通じた関わりがもてている者がいる一方で、卒業後には友人の存在や関わりがない者がおり、卒業以降の継続的な友人関係をもつにはきっかけづくりや家庭以外での居場所の有無など課題があると考えられる。

③ 家庭での状況について

本人の家庭環境における状態について、本人と

Table6-2. 面接調査内容 (2) 友人関係・対人関係の状況

対象	性別	BDI 得点	現在の 年齢	現在の所属	本人からの聞き取り	保護者からの聞き取り	
E	男	13	19	就労支援施設	いたって暇。寝てたり、近所の人と会うくらい。カードゲームしたり。	現在、友人はいない。近所の方とたまにドライブには行くくらい。	
抑うつ低群	J	男	1	17	高校2年	カメラ・ゲーム・メールしたりカラオケ行ったり。変な友人が多い。	2つ3つあるグループには入っている。席の横と後ろにうちにくる子がいる
	L	男	13	16	高校1年	休日はパソコン。動画をダウンロードしたり、PSPのソフトを取ったり、DVDをやいたりしている。友だちと遊びたいと思うが、友だちの家が遠いから遊べない。学校では、友だちと話したりする。	学校内では、仲良くできる子が数人はいるよう。週末は、唯一家で過ごせる時間ということもあってか、家でできること（パソコンか音楽を聴くか）をしている。最近は自転車に乗って外に出ることもあるが、頻度はそんなに多くはなく、たまにといった程度。
F	男	30	18	高校3年	友だちと遊ぶことはない。	友人はいない。電話やメールもしていない。学校の先生は信頼していたよう。	
抑うつ高群	N	男	29	16	高校1年	土曜日は部活。練習ボールははねなくてうまくいかない。部活の人8人くらいとたまにあそぶ。日曜日は漫画読んだりテレビみてるのんびり。家近いやつと遊んだり。＜楽しい時間？＞ない。部活は場合による。いいショットをうてると楽しい。逆に調子が悪いといや。	昼休みは最初5、6人でお昼を食べていたが、本人は一人で食べたいようで、今は一人で食べている。食べたあとは寝たりしている。週末は、部活がある。時々友達の家でゲームをしに行ったりしている。友人関係に関しては今のところ困っていない。高校に行き始めて、小・中の友達に会って話して帰ってきたりすることも。
	K	男	32	16	高校1年	＜休み時間？＞おしえませんが。＜休日？＞音楽のゲームとかをしている。歌詞がないやつをきいたり。	からかいなどはあるが、本人なりに楽しんで学校に行っている。中学校の友だちが4人ほど遊びに来る。ゲームの話やカードゲームの話で盛り上がっており、お互いに言いたいことを言っている様子。

保護者への聞き取り内容をTable6-3.にまとめた。

結果より、抑うつ低群と高群のどちらにおいても家庭場面における大きな問題性についての言及はなく、安心して過ごせている様子が伺えた。保護者からの聞き取りにおいても、身の回りのことを自分で行うことができる、生活リズムが整うなど成長点についての言及が多くみられた。また、本人の関心のあるテレビやインターネットを家族で共有していることについての語りも見られ、家族の本人に対する理解と成長を見守る家庭環境が整っている状態であることが示された。障害児をもつ母親の障害受容の過程には、子どもの障害の

受容とわが子の受容（桑田ら，2004）の側面があり、本研究における対象者の母親においては、子どもの障害を理解しながらも個別的な成長を見守ることができており、そのような環境で子どもが安心して過ごせていると捉えられる。青年期以前の集団療育の場における母親への援助は、青年期においても子どもの成長を感じられる重要な役割を果たしていると言えよう。

一方、抑うつ傾向と家庭での状況との関連については両群に特徴的な差が見受けられなかった。このことから、青年期の抑うつ傾向には家庭での状況以外の他の要因が存在している可能性がある

Table6-3. 面接調査内容 (3) 家庭での状況

対象	性別	BDI 得点	現在の 年齢	現在の所属	本人からの聞き取り	保護者からの聞き取り	
抑うつ低群	E	男	13	19	就労支援施設	(帰ったら) 真っ先にパソコン・日によっていろいろ変わって。ゲーム系。基本的にいたって普通 (に過ごしている)。	ゲームについて弟と話す。Mo.にもインターネットを見せてきたりする。生活で注意することは何もない。ごはんを食べて、歯をみがけと言うくらい。家では「暇」と言っている。
	J	男	1	17	高校2年	色々。動画みたり本読んだり。	1学期ねむれないことがあった。家ではインターネットで動画みている。Mo.も楽しめるものがあり面白かった。イライラは自分で処理できていなかったができることも。
	L	男	13	16	高校1年	家は楽しい。家ではマンガを読むことが多い。	寮生活よりは家の方が楽ではあるよう。最近は生活全般でも成長がみられることもあり、現在家で困っていることは特にはない。
抑うつ高群	F	男	30	18	高校3年	家では寝ている。 パソコン、DVDなどもあまりしない。	高校の間は朝の準備の仕方が変わった。以前は行きたくなくて2時間かけて朝の準備をしていたがそれが早くなってきた。学校が嫌ではなくなってきた様子で、3年時には単位をそろえるために努力をしていた。 休みの前の日からずっとゲームをしているので昼夜逆転する。
	N	男	29	16	高校1年	自分の部屋で漫画読んだりのんびりして過ごしている。勉強しなさいって言われるがあんまり好きじゃない。家族と過ごすのはそこそこ楽しい。今は引越しの話とかでばたばたしている。学校の編入試験でどんな問題がでるかとか。	特に困っていることはない。部活から帰って、ごはん、風呂、自由時間、寝るといったかんじ。自分でリズムを作っているよう。時間ある日は洗濯や風呂掃除もしてくれる。部屋では宿題したり、ゲームしたり。学校のことにに関しては、話してくれるほうだと思う。学校は楽しそうにしている。小・中のころは家でぐるぐる回ったりしていたが、今はそれがなくなってきた。
	K	男	32	16	高校1年	家ではテレビみてる。<何見てるの?>ヘキサゴンとか雑学王とか。<家族と過ごすのは?>普通。	学校に行っているときは規則正しい。朝補修がないと寝るのが遅くなる。家では、ゲームや一人で自転車で色々な所へ行き、ちゃんと帰ってくる。中学校に入って、友だちと自転車に乗って本屋さんなどいろいろなところに行くようになった。親から話しかけると、話してくれることもあるし、「秘密」と言われることもある。父親は友だちのように一緒に子どもとゲームをしたり、映画を観たりしている。学校のことにに関しては、母親に言うてくる。

と考えられる。

④ 今後の展望・援助期待について

本人の援助期待や今後の展望について、本人と保護者への聞き取り内容をTable6-4.にまとめた。

結果より、相談相手の存在がいるとした者が3名、いないとした者が1名、言及のなかった者が2名であった。また、将来の夢や今後の展望については、抑うつ低群では、「しっかりした所に（働きたい）」「文系に進む」「もの売りの仕事をしたい」と目的や目標が感じられる語りが見受けられた。

一方で、抑うつ高群においては将来の夢が「ない」と述べる者が2名おり、残りの1名も今後の不安についての語りが特徴的であった。抑うつ傾向との関連を見ると、困ったときに相談できる存在がいることと、将来に目標や目的をもっている状態であることが精神的健康に重要な役割を果たしていることが考えられた。

一方、保護者からの聞き取りにおいては、本人の抑うつ傾向に関わらず将来に「見通しがもてない」「不安がある」とした保護者が3名、具体的

Table6-4. 面接調査内容 (4) 今後の展望・援助期待

対象	性別	BDI 得点	現在の 年齢	現在の所属	本人からの聞き取り	保護者からの聞き取り	
抑うつ低群	E	男	13	19	就労支援施設	基本的に（話せる人は）Mo.の方が多い。将来の夢は…最終的にはしっかりした所に（働きたい）。	今必要なのは友だち。自分だけが苦しんでいると思っている。好きなことができる時間が必要かも。家では「ひま」と言っている。社会経験ができる場所が必要。 親が将来亡くなったとき生きていけるか。誰も結婚する予定はない。今、何が必要で何に支援を求めたらいいのか。
	J	男	1	17	高校2年	文系に進む・公務員がいい。	大学についてやシステムについて知りたい。会社勤めは無理と本人も母親も思っている。
	L	男	13	16	高校1年	困っていることや相談したいことを話せる人がある。友だち。＜将来の夢＞内定がほしい。働きながら普通高校の単位を取りたい。もの売りの仕事をしたい。	今後どこに相談をしていくのがいいのかは課題。これから就職のことも考えなければならぬがどうするのかまだ見通しが無い。ジョブコーチやハローワークの支援が、どのくらい利用できるのか。また、高3からは保護者が率先して本人の将来を考えていかなければならない。どうなるか不安。
抑うつ高群	F	男	30	18	高校3年	＜相談相手？＞おらん、＜またもくもくグループに参加したい？＞今はない＜将来の夢＞ない	最終的には就職をしてほしいと思う。将来が見えない不安がある。具体的に何をしたらいいのかわからない。就職・結婚、そういう姿が見えない。けど今やるべきことをひとつひとつやるだけ。グループについては本人には参加してほしいと思う。人と関わってほしいと思う。
	N	男	29	16	高校1年	相談できる人は少しいる。友達が話しやすい。＜もくもくにまた参加したい？＞知らない人と関わるのはやってみよう。＜将来の夢＞大学にいったらどうなるんだろう。大学にいかないとうなるのかはわからない。今は〇〇を離れたくない。〇〇（都会）にいくと知らない人がいっぱいいるし。	課題は会話。面接とか説明とかが苦手。今後編入試験や就職での面接なんかは大丈夫か。作文も苦手。日常生活ではそこまで困らないが。グループはもう本人も希望しないだろう。あまり知られたくないだろうし。今は困ってない。高校の担任にも成長したといわれた。まじめな部分を理解してもらえればいいが。6年後どうなっているのだろう。独立してほしいが、家族4人で仲良くできたらそれもいいかな。本人は「大学いかなだめ？」「結婚できるわけないやん？」と言っている。Mo.が「Mo.たちは先に死ぬんやけん自分で生きていかんと」といういと「そーねー」と考えているようだった
	K	男	32	16	高校1年	＜相談相手？＞またもくもくグループに参加したい。サークル、クラブとかしたい。＜将来の夢＞ない。	ある程度はできるようになっている。パニックになる状況をコントロールできるのが今後の課題。今後、子どもの気分で参加したいのであれば、またグループに参加してもいい。話がいろいろできるので、別の物にも興味持てるような促しがあれば。進学や大学について相談に乗ってもらえるところがあれば。

な課題について述べられた保護者が4名おり、援助を求める者が多かった。具体的なニーズとしては、「友だちが必要」「社会経験のできる場所が必要」「人と関わって欲しい」とする対人関係や場に対する希望、「進路」「就職」など高校を卒業した後の社会的な整備や情報に関するものであった。一方、「今、何が必要で何に支援を求めたらいいのか」「具体的に何をしたらいいのかわからない」など支援の方向がわからないといった保護者が3名いることが示された。経済的自立の程度や結婚などのライフイベントは個人によって選択に幅があるため、何らかの援助が必要と感じながらもどう求めて良いかわからないことが青年期に特徴的なものであると考えられる。

4. まとめと課題

本稿の目的は、発達障害を対象とした集団心理療法「もくもくグループ」に過去参加していた最終者を対象に青年期の適応と課題を検討することで、発達障害を有する青年に必要とされる心理援助について検討することであった。

従来の自閉症をはじめとする追跡調査では、対象者の半数～8割が予後不良（poor）とされてきたが、本研究の対象となった集団心理療法経験者については、抑うつ傾向尺度および青年期の適応感尺度の結果からは二次的な問題の状態が比較的良好であることが示された。本研究の対象者は、児童期から集団心理療法を体験することによって、「もくもくグループ」がねらいとしている他者から受け入れられる経験、情動を共有する経験（遠矢，2006）などが、青年期においても対人関係の良好さを促し、学校・職場等での居心地の良さ、被信頼感・受容感、劣等感のなさといった、現在の対人関係に支えられた適応感に影響している可能性が示唆された。

しかし、中には抑うつ傾向が臨床群の領域にあり、継続的な支援を必要とする者が約4割いることが示された。発達障害群の中でも抑うつ傾向を

高く示した者は、自分が役に立っていない感覚といった劣等感が顕著に見られたことから、青年期の精神的健康には社会的な存在として役立っている感覚をもてることが重要であると考えられた。

また、面接調査の結果より、集団心理療法経験者は学校や家庭場面で目立った問題はなく、安定した環境で過ごしていることが示された。しかし、抑うつ傾向が顕著であった者と正常であった者における語りの内容の比較から、所属先で主体的に取り組んでいる感覚がもっていること、相談できる相手の存在がいること、将来の展望の有無が精神的健康に関連していることが考えられ、今後自分がどのように生きていくのか、自己理解や自己決定における課題が発達障害や対人関係に困難を有する青年においても重要な視点であることが示された。

本研究の結果より、発達障害を有する青年本人に対しては、抑うつ状態を示す青年のフォローや、劣等感に対する心理支援の検討が必要であることが言えよう。また、保護者に対しては本人の主体性や将来への目標がもてるような支援を行うことで、保護者ができることについて方向をもつことができ、漠然とした不安に対する支援が行えると考えられる。それら支援のために、児童期の療育期以降もフォローできる体制が必要であり、発達障害や対人関係に困難を有する青年の理解を深めていく必要がある。

今後の課題として、本研究の対象者の多くが高校生であったことから、就職や職場適応など、社会人としての適応状態については十分に検討できなかった。また、半構造化面接対象者も男性がほとんどであり、今後は性差を含めた適応の違いについても理解していく必要がある。

文献

加藤義男・木村 真・高橋 昇・石母田明・北村 嘉勝・三田祐一（1994）：青年・成人期自閉症の適応の現状と課題—追跡調査を通して— 岩

- 手大学教育学部研究年報, 53, (2), 91-105.
- 小林隆児・村田豊久 (1990) : 201例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題 発達心理学と医学, 1, (4), 523-537.
- 桑田左絵・神尾陽子 (2004) : 発達障害をもつ親の障害受容過程についての文献的研究 九州大学心理学研究, 5, 273-281.
- 田畑 洋子・吉村 智恵子 (1997) : 大学における心理教育相談室活動に関する一考察 (2) : 名古屋女子大学教育研究所心理教育相談室における追跡調査 名古屋女子大学紀要 人文・社会編, 43, 131-144.
- 遠矢浩一 (編者) 針塚 進 (監修) (2006) : 軽度発達障害児のためのグループセラピー. ナカニシヤ出版
- 遠矢浩一・針塚 進 (2010) : 発達障害児のための集団心理療法 九州大学総合臨床心理研究 2, 特別号, 3-10.

(受理 : 2012年 3月31日)

**Study on social adaptation and support for youth with developmental disorder.
: Analysis of Follow-up Targeting Graduates from group psychotherapy “Moku-Moku group”.**

Airi ZAMAMI, Koichi TOYA, Susumu HARIZUKA

Department of clinical psychology and human development, Faculty of human environment studies,
Kyushu University

The purpose of this study is to consider about social adaptation of youth with developmental disorder that had experienced group psychotherapy when they were childhood. BDI-II and social adaptation scale questionnaire and semi-interviews were conducted for 16 participants (mean age=17.50) as follow-up targeting graduates. As results, 10 participants are normal or less depression and have no significant difference from norm point in social adaptation scale. However, 6 participants have higher depression and feeling of inferiority. Also, semi- interview showed that adapted participants have person that they can consult with when they face trouble in each place they belong to. And adapted participants have felling of adaptation that based on interpersonal relationship. On the other hand, maladjusted participants have lower felling of subjectivity and cannot have future perspective. Psychological supports for youth with developmental disorder were considered.

Keywords: youth with developmental disorder, social adaptation, Follow-up targeting